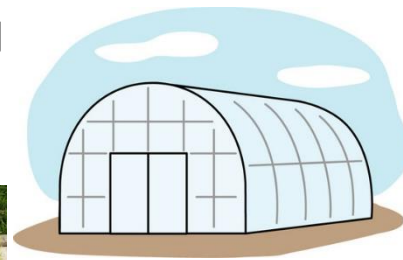




イネばか苗病の発生と防除対策

イネばか苗病は、主に**種子で伝染**します。購入した種子（飼料米、多収性専用品種など）であっても**種子消毒剤の処理がされているかを必ず確認し、処理されていない種子**については、下記を参考に必ず**種子消毒を徹底**してください。



イネばか苗病の主な生態



- 1) 主な伝染方法は、種子伝染です。前年にイネばか苗病菌に汚染した籾を種子に用いると、種子伝染します。
- 2) 育苗期では、第2葉期以降に症状が現れ、葉や葉鞘が伸びて徒長し、色が淡くなります。
- 3) 本田に移植後も、葉鞘や節間が徒長して黄化し、やがて枯死します。この枯死に至る過程で、株元などに多量の病原菌胞子を形成し、これが伝染源となります。
- 4) 病原菌は風などで飛散して、開花期の穂に付着し、籾に伝染します。

防除対策

- 1) 前年にばか苗病が発生している圃場から、決して自家採種をしないでください。
- 2) **未消毒種子**は、ばか苗病に効果のある薬剤で種子消毒するか温湯消毒を必ず行います。なお、温湯消毒の単独処理より、温湯消毒後に微生物農薬を組み合わせる処理は防除効果を高めます。
- 3) 育苗中や本田でばか苗病が発病した株は、早期に抜き取り、その場に放置せず、離れた場所で土中深く埋設するなど適切に処分します。
- 4) 前年にばか苗病が発生した農家では、作業場を清掃して清潔を保ち、浸種、催芽で使用する容器や機材等は、あらかじめ丁寧に洗浄しておきます。また、苗箱やシート等は使用前に消毒剤（ケミクロンGやイチバン）で処理します。
- 5) 周辺に**イネの種子採種圃が設置されているほ場**では、育苗中に**ばか苗病が発生した苗箱のイネは植えない**ようにお願いします（採種圃へばか苗病の胞子が飛散し、ばか苗病が発生してしまうと種子として不合格となるため）。

種子消毒の方法

水稻種子は毎年更新しましょう



1) JA等から購入する**薬剤吹付種子の場合**は、

既に**種子殺菌剤**（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と**殺虫剤**（対象害虫：イネシガレセンチュウ）が**吹付け処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。**

2) **未消毒種子の場合**は、

塩水選（うるち品種は比重1.13）で籾を選別し、次のいずれかで種子消毒を行い、浸種や催芽に入ります。

(1) **化学農薬**（モミガードC・DF[F:3と12とM]またはテクリードCフロアブル[F:3とM]などとスミチオン乳剤[I:1B]）の規定量液の中で種籾（袋）を浸漬してよくゆすり、薬液が袋の中心部までいき渡るようにします。このため、種籾袋に種子を詰めすぎないようにし、種籾1kg当たり薬液20位を目安にします。長時間浸漬では、処理中に1~2回攪拌します。防除効果を安定させるため、水温は10~15℃に保ち、処理後は水洗せず、浸種作業に入ります。

注) FはFRAC、IはIRACコードを記載しました（コードが複数は混合剤）。

(2) **温湯消毒**：「うるち品種」は、種子を60℃に保った温湯に10分間浸漬処理し、処理後は多量的水中で速やかに冷却します。なお、割れ籾が多い場合は、温湯消毒により発芽率が低下する危険性がありますので、避けてください。

(3) **生物農薬**：（エコホープ、エコホープDJ、タフブロックなど）は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。

※ **なお、温湯消毒や微生物農薬での種子消毒は、それぞれの単独処理では効果が劣る場合があるため、これらを組み合わせた処理で効果を安定させます。** 記載農薬の登録は、令和6年3月5日現在です。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。